

新刊
紹介

For some in ancient books delight,
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be though expert in both.

小倉襄二（文学部教授）著「社会保障と社会問題」 京都・汐文社、B6判四〇九ページ、定価七八〇円。

社会保障は先進的な資本主義諸国の社会機構のなかにすでに制度化され、あらゆる生活要求の充足を図る自動調節装置的な役割をはたしつつある。

ひるがえって、わが国の社会保障の現状はどうであろうか。戦後、二十数年にして、いまや世界の有数な生産国にまで躍進したわが国ではあるが、このゆたかな商品生産社会にあって国民所得の平均は後進国なみであり、「ゆりかごから墓場まで」の生活は安全を保障されるところか、あらゆる面で危険がいっぱいになってきている。

この矛盾した生活実感を基軸として、わが国の社会保障の実態と動向を追究し、解明しようとしたのが本書である。著者は学究生活以来、社会福祉、社会事業の視角から社会保障の理念と制度化過程を終始、考察しており、資本の論理を分析しつつ、労働者、低所得階層の立場にたって労働条件、生活の諸相、児童問題、老人問題、身体障害者問題、医療問題など広く各分野にわたって鋭敏で適確な理論を実践活動を通して構築し、たえず社会のどん底であえぐ人々の味方となって社会保障のあり方を究明してきた。本書は、この長年にわたる著者の研究成果を集大成し、体系化したものである。著者が情熱を燃してとりくんできた社会保障のあり方と社会問題の諸相が本書において結晶し、応々にしておき忘れ、等閑視されがちな生活要求を綿細に分析し、流動的な都市化現象のなかで基本的に創造すべき社会保障の枠組みを浮彫りにしている。

社会保障理論はとかく理想的な抽象論になりがちであるが、本書の特長は終始、現状の具体的な分析と調査を前提として論述

されていることである。全篇は第六部から構成されているが、第一部は社会保障の理念と体系を社会総資本との関連において論究し、社会保障の制度化が空洞化、または形骸化する欺瞞性を追求し、その因果関係を福祉行政・公的扶助施策と被保護者層との問題に焦点をあてて解明している。第二部は医療保障にあてて、難題である医療問題を整理し、総合医療のあり方と医療社会事業の本質を論じ、第三部は生活保障、老人、児童、身障者問題など国民が日常当面している福祉諸問題をその施策の立場から究明している。第四部はわが国に根深く存在している部落問題を歴史的に、また実態調査を通して、その解放への道程を明らかにするとともに地方自治体の同和行政を痛烈に批判している。第五部は著者がとくに情熱的にとりくんだ「朝日訴訟」の全過程を総括したものであって、わが国社会保障の限界と水準を歴史的に示す意味においても貴重な文献的価値をもつものである。第六部は地域福祉論が展開されており、地域社会の福祉の向上を図る諸問題を解明し、今後の課題を論じている。

著者の多彩な文筆と、実践活動はすでに定評があるが、ゆたかな文学的才能と誠実で純粹な学者的良心が結集した本書は、少し難解なきらいはあるが、広く今日の社会を憂える人々に読まれて欲しい著作である。

(住谷 馨)

角田豊(文学部教授)著「社会保障法の課題と展望」 京都・法律文化社、A5判二五八ページ、定価一三〇〇円。

社会保障の研究者にとって頭をうつかべは社会保障の法体系とその構成についてひるがるけわしい領域である。社会保障の制度上の諸問題や政策論、あるいは対象——ニード——に即して分析をすすめていて、その根拠としての法体系——構成に関する理解の不足が一つの重大なネックとして、ひいては、その分析や提言についての不安、ふたしかさとして研究者をなやますことになる。しかも、法律研究は盛況のようであるが私たちの希求する社会保障法についての研究はとばしいし、またすでに発表されている部分のみではあまりにも未開拓という外なかったのである。本書は、そうした意味において、社会保障法の解明に本格的に

とりくむことによって社会保障研究にとつて重要な礎石をすえたものといえよう。

論集のかたちになっているが、体系として社会保障法の各分野が位置づけられ、社会保障、(所得保障、無拠出制所得保障、医療保険制度発展への課題、社会保障の公的扶助化問題) 社会手当と最低賃金制(家族手当と家族給付、最低賃金制と家族手当、最賃問題の現状と課題) 社会福祉(最近における社会福祉諸法の制定過程) 社会保障の実算給付、公的扶助(生活保護基準の改正、朝日訴訟の残した問題点) など広汎な論文をふくんでいる。

論集をつらぬく志向は、*「現代の社会保障法が当面している、体系・構造の変化の現状と問題点およびそこから生ずる課題を日本の現実と最近の国際的動向とから、はり下げて把握しよう」*という視点である。社会保障法の体系についての項目にみても、いわゆる「法」の法理的分析ではなくて、歴史的な展界と現実の経済——社会的状況の推移との相関を的確にとらえることを基礎として、法体系の形成、整序について論旨が構築されている。空疎におちいりが

ちな法体系論を生々した現実的関心と発想への触発が意図されている。日本の現実のみならず、本書の特徴として、著者も語っているように、一九六六年八月の国際社会法学会への参加などによってふかめられた国際社会保障、比較社会保障法というべき詳細な分析をあげることができる。この分析についてはすでに研究、資料の紹介がなされているが、著者によって、ヨーロッパ諸国における流動的な法と制度のさいきんの問題点がとりあげられ、わが国の現実への対応としてゆたかな提言がなされている。ISSA(国際社会保障協会)の資料も十分に消化活用されていて、国際的観点よりの社会保障の理解にとつての示唆するところが多い。私自身は、とくに社会手当、公的扶助、最低賃金制の連関についての論述に興味があった。著者とは共同研究の場合、あるいは個人的にも社会保障をめぐる主題について啓発をうけている。著者の当面の問題意識の集大成としての本書は社会保障研究にとつても現実の問題の解明と未来にむかっつての研究分野を拓く労作であるといえよう。

(小倉)